本実践・研究から見えてくること

研究協力者　吉澤　恭子
（秋田大学大学教育文化学部）

聴く・聴き合うアンサンブル活動が創り出す
音楽科の見方・考え方を育む実践

音楽実践の楽しさと難しさに向き合いながら，省察を生み出していった授業

音や音楽を重ね，合わせる行為すなわち「アンサンブル」（フランス語で「一緒に」を意味する）活動には，仲間とともにそうした時間を共有できるという醍醐味がある。教材は『音楽のおくりもの３』の後方に掲載されている合唱曲《ありがとうの花》である。前半は斉唱で，後半から２つのパート（上パート：歌詞を伴う主旋律，下パート：副次的な旋律で「ル」で歌われる）に分かれる。斉唱が中心である低学年の実践スタイルから発し，音楽の仕組みの異なる声を用いたアンサンブル活動を提供してくれる作品である。前時まではパート毎による練習で留まり，児童は本時で初めて上下パートを合わせることを体験した。合唱が始まる箇所に入り，合わせた瞬間，音の響きや重なり方への違和感や不快感をその空間にいた誰もが感じたことだろう。児童の反応は素直である。２つの異なるパートを合わせてみたらなんだか思うように歌えない，うまくできなかったという困難に直面した経験から，児童が感じる音楽科の見方・考え方に寄り添う省察が生まれていく実践場面へと展開していった点において，成功した授業であったといえる。

アンサンブルの活動形態を変えながら「演奏者」と「聴き役（聴衆）」という役割を担い，互いに音楽を聴き合い試行錯誤しながらも省察していく姿は，児童の発言内容に表れていた。例えば上パートの指摘事項として「高い音に注意すること・少し（声を）響かせた方が良い（技能・表現方法への視点）」「旋律なので聞こえないといけない（重ね方・音量バランスへの気づき）」「叫んではいけない（技能面）」，下パートでは「出だしはおくれないこと（技能面）」「なめらかに歌うこと（技能・表現方法への視点）」「息の吸い方・ブレスの仕方（技能面）」等が挙げられる。こうした児童の気づきは，音楽科の見方・考え方の視点と重なっている。児童が多面的な気づきを耳で捉え，それらを言葉で言い表すことができる力は，言語活動と結びつけながら，聴く・聴き合うことを重視してきた日々の実践の積み重ねが培ってきたものであろう。

音や音楽を介した非言語コミュニケーションによる支援の活用

音楽実践と関わる言語活動には，児童が感じ，気がついたことを文字，絵や図形で書き表したりする行為も含まれるが，オラルによる対話の中で，児童が口に出す音楽的な用語だけが一人歩きし，用語の使い方が児童の音楽理解と繋がっているかどうか判断に困ることがある。また教師の説明が，児童の音楽理解に行き届かない場合もある。音楽科には非言語による手段を用いること，例えば声や楽器による演奏で，あるいはジェスチャーを伴いながら他者との対話（コミュニケーション）を可能にさせるという特性がある。聴く力の育成を重視した場合，音や音楽を介して児童を支援する方法が役立つ。本時ではうまくできなかったアンサンブルの質を改善するための練習過程で，児童が歌う上パートに大山先生がソプラノ・リコーダーで下パートを重ねて演奏する場面があった。主旋律ではないパートを，声とは異なる音質をもつ楽器を活用することで，声と楽器の音質そのものの違いを認識させ，聴き分けられる耳の育成を目指した工夫が提示されていた。　最後に《ありがとうの花》は一つのフレーズに歌詞が詰まっており，リズムも細かい作品である。授業全体を通じて模範演奏のようなテンポに徹した実践方法に，児童の技能が追いついて行っていない場面が目立った。技能の獲得と表現力の追求は表裏一体である。音楽がわかるようになり，技能力が身についてくると，量よりも質の向上を目指そうとする思考の変化が見られてくる。次のステップでは成長段階に応じた技能力の実態をふまえ，児童の省察の中で行き交う音楽的な見方・考え方の多様な視点や種類を整理した上で，実践方法の工夫を期待したい。